

世代を超えた  
多様な人のつながりが  
地域への思いを培う

島根県益田市では一〇年以上にわたり、  
子どもたちが大人と対話する  
「ひとづくり」を行政が進めてきた。  
地域の大人もまた、  
子どもとのつながりを強めるべく行動し、  
まちの未来の担い手が育ち始めている。

海の色に魅了される小浜海岸をはじめ、島根県  
益田市は風光明媚な自然景観に恵まれている。  
左の岩礁・宮ヶ島に立つ衣笠須神社は、干潮時  
のみ道ができる参拝が可能。石見地方に多い  
石州瓦の独特の赤褐色が、景色を鮮やかに彩る。

取材・文 山内史子  
写真 野瀬勝一

## 過疎のまちで進む 未来の担い手作り

日本海に面した島根県益田市は、県西部の石見地域に位置する。山口県、広島県に隣接し、二〇〇四年の旧美都町、旧匹見

中世 東アジア圏との交流で  
港湾都市として栄えた益田市には、当時の史跡や文化財などが  
今も残る。これらの魅力を紡いだストーリー「中世日本の傑作  
益田を味わう—地方の時代に輝き再び—」は、二〇二〇年に文

化庁より日本遺産として認定された。

市の最大の課題は、ほかの地

方都市と同様に人口の減少たと  
間部の旧匹見町は、一九六〇年  
代に豪雪の影響で急速な人口流  
出が生じ、「過疎」という言葉を  
生んだ地域でもある。

一九八五年には六万人を数え、減っています。それを何とか食い止めたいとの思いから、出産や子育てをサポートする各種補助金や健康寿命を延ばすための



サイクリングの振興を進める中、地元でも自転車に興味を持つ人が増えてきたと話す市長の山本浩章氏は、自らも自転車とウエアを購入。市役所自転車部のメンバーと共に、自然豊かなまちを走る楽しさを実感している。

催されている  
数々の施策  
を主ぐのは「

数々の施策の中で市が最も力を注ぐのは「ひとづくり」だ。

「益田」にとって、未来の担い手、地域の担い手、産業の担い手が



飛鳥時代の歌人・柿本人麻呂を祀り、境内にはその像が立つ  
高津柿本神社。人麻呂の生涯には謎が多いが、益田で生まれ、都で名をはせた後に故郷で最期を迎えたと地元に伝わる。

萬福寺は、中世にこの地を本拠としていた益田氏が創建した寺院。雪舟作庭とされる庭園と共に、往時の様式を現代に伝える。



つも都茂鉱山跡は881年に銅鉱が発見されてから、1987年の閉山まで1100年以上の長きにわたり操業が続いた。なお、坑内で発見された新鉱物BiTeは鉱山の名を取り、「都茂鉱」として知られる。  
(写真提供：一般社団法人益田市観光協会)

そのプロジェクトをスタート時  
から先導してきたのが、当時、  
市教育委員会にいた大畑伸幸氏  
だ。小中学校の教員を経て、市  
教育委員会で長く社会教育に尽  
力。退職後にNPO法人おむす  
びを自ら立ち上げ、今も益田の  
ひとづくりを強力に推し進める。

## 子どもたちの 意識を変えた 地域の大人との対話

子が地域に愛着を持ち、生き生きと活躍してほしい。未来を支える子どもたちの育成が最初に取り組むべき課題だと考えました。就任三年後の二〇一六年には行政、教育機関、民間の事業者や団体などが連携する、益田市ひとつづくり協働構想を策定。子どもたちと地域の大人とをつなぐために、対話プラスや「益田出版・職場体験」といった独自の取り組みが、ライフキャリア教育として重ねられてきた。

「がない。大人と子どもたちがつながり、そこに信頼関係が生まれれば、益田で暮らす素晴らしさに気付く種になるだろうと考えました」

子どもたちが家族や教師以外の大人とナナメの関係を持つといふ取り組みだが、大畠氏らはできるだけ小さな子どもの頃から、大人との対話を重ねること

ます。大学卒業後に帰ってくるのはわずか三割。その理由を突き詰めていく中で、家族や教師以外に気軽に話せる大人が身近にいないという声を子どもたちから聞いてショックを受けたんです。地元にロールモデルとなれる大人が大勢いるの、出会へ

が重要だと考えたという。各地域の公民館が活用され、小学生は高校生、中学生は地域の大人人と、一対一で時間をかけてじっくり対話する。現在の対話プログラマにつながる取り組みが始まつた。

を学びたいのかを市役所の職員  
が面接してから訪問させますから  
、本気度が違います。そこまで  
で作り込んでいくと、子どもたち  
の益田や地元企業への関心が  
強まっていることが、はつきり  
と分かります」

A medium shot of two young men sitting on the floor of a gymnasium. The man on the left is wearing a black beanie, a grey zip-up hoodie, and dark pants. The man on the right is wearing a white polo shirt and dark pants. They are both smiling and looking towards each other. In the background, other people are sitting on the floor, and a person in a blue shirt is standing. The gymnasium has wooden walls and a polished wooden floor.



上／じっくりと時間をかけた対話を介して、信頼関係が結がれていく

下／中学生のアイデアから生まれた灯火祭。地域の人と共に作り上げる過程で、互いの距離が以前より近づいた。

(同上提供：NPO法人かわぐち)



「対話はスキル。質問を重ねることにより、相手が自分を理解しようとしてくれている、という思いが子どもたちの中に生まれるんです」と、NPO法人おむすび理事長の大畠伸幸氏は語る。

いろです。子どもたちは多様な大人との出会いを通じて、地域の大人に対しても憧れを持つようになりました。中学生を対象とした益田版・職場体験にも対話を取り入れました。なぜその仕事を就いたのか、何を誇りにしているのか、そうしたことなどを子どもに伝えてほしいと、受け入れ先の地元企業に事前研修まで

理解し  
れるん  
る。

す「灯火祭」が催される。中学生が発案して始まったというこのイベントは代替わりを経て今年で六年目を迎えたが、来場者は一〇〇〇人以上を数える。

「対話を重ねていくと、そのうち子どもたちは自分で公民館を訪れ、やりたいことがあると言いました。その一つが、西益田地区の灯火祭です。こうして取り組みの積み重ねにより、最近では、中学生が、『自分にどう地域の大人は、最初に協力してくれる仲間』だと話すようになつたんです。益田の子どもたちの意識は、確実に変わってきた」と思っています」

益田の魅力を発信し  
人々を惹きつける  
ホテル

「このまちが好きだと、肯定的に捉える子どもが増えてきた実感はあります」

そう地域の変化を語るのは、益田駅近くに立つマスコスホテルを嘗む洪昌督氏だ。

「かつての自分の記憶を振り返

ると、クリエイティブな職業を目指していたものの、憧れるような大人に会ったことがなく、益田では人生は花開かないと否定的な感情を抱いていました」

高校卒業後は東京で映画関係の学校に通い、音楽活動を行うなど充実した生活を送っていたが、一〇年ほどで宿泊業などを営む業者を継ぐために益田に呼び戻された。戻ってからしばらくの間は、目の前の仕事に追われる毎日を過ごしていたが、クリエイティブな仕事への思いがくすぶつっていたという。そんな時に、偶然、高校の級友に再会したことをきっかけに、デザイン会社を立ち上げた。

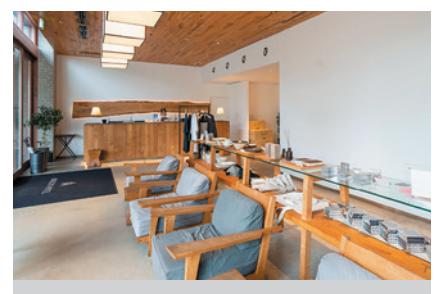
「あらたなクライアントが増え

る」と、クリエイティブな職業を目標にとつて面白いと思える大人に会ったことがなく、益田では人生は花開かないと否定的な感情を抱いていました」

高校卒業後は東京で映画関係の学校に通い、音楽活動を行うなど充実した生活を送っていたが、一〇年ほどで宿泊業などを営む業者を継ぐために益田に呼び戻された。戻ってからしばらくの間は、目の前の仕事に追われる毎日を過ごしていたが、クリエイティブな仕事への思いがくすぶつっていたという。そんな時に、偶然、高校の級友に再会したことをきっかけに、デザイン会社を立ち上げた。

二〇一九年にはあらたなホテルを開業した。「クラフトホテル」をうたい、益田ならではのライフスタイルを提案する。空間デザインから器やファブリックの類いに至るまで、徹底して地場の企業や職人を探し出したという。

さらに洪氏は二〇二五年から、ホテルのダイニングで、読書会、そして県内外の文化人やアーティストを訪れるアーティストの感覚で、益田ならではのライフスタイルを提案する。空間デザインから器やファブリックの類いに至るまで、徹底して地場の企業や職人を探し出したという。



上／「ホテルは衣食住が詰まった施設。全てにおいて気負わず気取らず、地元の能力を駆使しながら良質なものを打ち出したいと思っていました」と話す、マスコス社長の洪昌督氏。

下／ホテルのレセプションから続く空間には、地元の職人の手による家具類や食器などが置かれている。



島根県芸術文化センター グラントワは、屋根と壁に約28万枚の石州瓦を使った建物そのものが、圧倒的な存在感を放つアートになっている。設計した建築家・内藤廣氏の縁で、氏がまちづくりに参画する東京渋谷との交流が始まっている。

ストを招くトークイベントをスタートさせた。

「地元の人は、最初は遠巻きに眺めるだけでしたが、だんだんホテルを訪れ、イベントにも参加するようになりました」

ホテルはカルチャーライフの発信地であるとともに、内外の人々の集いの場としても機能し始めている。

復活した映画館もまたまちのコミュニティに

カルチャーの面では、二〇一二年に誕生した映画館、小野沢シネマも興味深い存在だ。館長の和田浩章氏は、千葉県の出身で、映画館の支配人など東京で映画関連の仕事に携わった後、二〇二一年に妻の更沙氏の実家がある益田へと移住した。



小野沢シネマ館長の和田浩章氏と更沙氏のご夫妻。2008年に映画館としての役割を終えた空間は、スクリーンや座席などを含めてほぼそのまま再開できるほど、きれいな状態が保たれていたのが幸いだったという。



小野沢シネマの入る施設は、1981年にボウリング場やホテルなどを含む総合レジャービルとして完成し、若者が集う場として話題を集めた。

認知度が高まり、映画会社と粘り強く交渉することで作品が充実し、次第に客足は伸びていった。

「映画館は初めてという子どもたちも多かったのですが、話題作や若い世代向けの作品をきっかけに映画に関心を持つ人が増えてきました。地域の皆さんのが見たい映画を提供するのも大切ですが、一方で、館長としてぜひ見てもらいたい映画も少し混ぜたり……。受付にいる僕や妻に、感想を伝えに来る中高生がだんだん増えてきて、ときには

開館一年目はメジャーな作品の上映がかなわず、思いを込め選んだ作品も受け入れられなかつたという。ビラの手配りで



グラントワでは、世界的な企画展を催すほか、地元で受け継がれてきた伝統芸能も紹介する。写真上は、喜阿弥地区に伝わり、島根県無形民俗文化財指定の「益田糸操り人形」。写真下は、2019年には日本遺産に認定された「石見神楽」。

(写真提供:一般社団法人益田市観光協会)

欠かせない存在になつてきている。

「誰もが気軽に帰つてこれる、

そんな映画館にしたいですね」と、

和田氏は笑顔を見せた。

## 地産地消で地域の活性化を目指す

益田市内を中心に山口県、広島県を含めた二四店舗を展開する老舗スーパー、キヌヤ社長の寺戸裕之氏が、地産地消について語る。

「県外資本の参入もある中、

地域と連携して地産地消に力を注ぎたい。そんな思いで、二〇一〇年に生産者とのネットワークであるローカルブランド協力会を始めました。会員数は、当初九二名でしたが、現在、約九〇〇名を数えます。各店舗には、生産者さんが新鮮な野菜を直接納品するコーナー『地のもんひろば』を設け、人気を集めています。数量、価格とともに生産者が自ら決定するルールです。量販店としてはなかなか難しい面もありますが、生産者が無理なく参加できるので、続け

「県外資本の参入もある中、地域と連携して地産地消に力を注ぎたい。そんな思いで、二〇一〇年に生産者とのネットワークであるローカルブランド協力会を始めました。会員数は、当初九二名でしたが、現在、約九〇〇名を数えます。各店舗には、生産者さんが新鮮な野菜を直接納品するコーナー『地のもんひろば』を設け、人気を集めています。数量、価格とともに生産者が自ら決定するルールです。量販店としてはなかなか難しい面もありますが、生産者が無理なく参加できるので、続け

「県外資本の参入もある中、地域と連携して地産地消に力を注ぎたい。そんな思いで、二〇一〇年に生産者とのネットワークであるローカルブランド協力会を始めました。会員数は、当初九二名でしたが、現在、約九〇〇名を数えます。各店舗には、生産者さんが新鮮な野菜を直接納品するコーナー『地のもんひろば』を設け、人気を集めています。数量、価格とともに生産者が自ら決定するルールです。量販店としてはなかなか難しい面もありますが、生産者が無理なく参加できるので、続け

「県外資本の参入もある中、地域と連携して地産地消に力を注ぎたい。そんな思いで、二〇一〇年に生産者とのネットワークであるローカルブランド協力会を始めました。会員数は、当初九二名でしたが、現在、約九〇〇名を数えます。各店舗には、生産者さんが新鮮な野菜を直接納品するコーナー『地のもんひろば』を設け、人気を集めています。数量、価格とともに生産者が自ら決定するルールです。量販店としてはなかなか難しい面もありますが、生産者が無理なく参加できるので、続け



「輸送距離が短い分、CO<sub>2</sub>の排出が軽減されますので、SDGsの観点からも地産地消は大切なことだと思っています」と話す、キヌヤ社長の寺戸裕之氏。後ろの地のもんひろばには益田の特産品が並ぶ。

地元の味や物で

あつたり、古くからの風習、そ  
ういったものを大切に思う方々  
が多いように思います。地元産  
品を子どもたちの世代に残すた  
めにも、ローカルブランドを地  
道に育てていきたい、そう考え  
ています」

の活動が耳目を集めます。福岡県  
出身の上床氏は東京で働く公務員  
だったが、二〇一八年に開催  
された「都市交流を基礎とした  
高津川流域関係人口創出事業」  
に参加したことが益田との縁を  
結んだ。高津川は益田の誇る清  
流で、醸造所の社名に取り入れた。  
「プロジェクトの終了後も益

田の関係者との交流が続きまし  
た。もともとビールと宴席が好きで、いつかビール造りをした  
いと触れ回つていたんですが、周囲の勧めもあって本当に話が  
進みだしたんです。準備を進め



## I ターンの新規事業者もまちの未来を思う一員に

新規事業者の中では、東京から  
のやり取りはもちろん、各層

「まちや生産者さんが元気を失えば、商いも衰退します。で  
すから協力会の皆さんとは日々  
のやり取りはもちろん、各層

の情報交換会を開催して交流を深め、ご意見やご要望をしつか  
り伺うことで、

地域活性化のお役に立ちたいと  
考えています。

うちの強みは、  
地域密着で古く  
からのお客さま  
が多いんです。

地域活性化のお役に立ちたいと  
考えています。

うちの強みは、  
地域密着で古く  
からのお客さま  
が多いんです。

うちの強みは、  
地域密着で古く  
からのお客さま  
が多いんです。

スも作った。醸造の技術者に加え、地元出身の二名が働く。シャインマスカットをはじめ、原材料には地場の特産品を使用。地域と絆が深まるうちに生産者が自らのアイデアを持ち込むケースも増え、クロモジやイチゴといった一〇種類以上のティースト

がつかなくなつたといふか、弾  
みがつきました

「益田では小規模な活動でもメディアが取り上げてくれる所以、やりがいを覚えますね。都市圏にはない、地方ならではの魅力です」と話す、高津川リバービア村長の上床經理氏。



そう話す上床氏は、特産品の販売会や移住者の説明会などに積極的に参加。さらには、まちなかから車で約一〇分の萩・石見空港の施設を活用し、ビール工

かな自然があり、食べ物や水はおいしい。このまちでずっと暮らしていきたいのですが、将来的に住む人が減つていけば、今までの快適な生活を維持できなくななるかもしれません。そうならないうようにという思いもあって、多くの方と共に、自分もまた地域の営みに関わっていきたいと考

私は新規事業者かつ県外からの移住者でしたが、地元経営者の勉強会に参加する機会もあり、力を貸してくれる方が多かつ

ゆつくりと  
実りつつある

「人懐っこく、誰にでもオープ  
ンに接する」

「益田は外から来た人が溶け込みやすいまちだとよく言われます。実際、他県出身の私もそうでした。その風土は、港町だった歴史が培ったのかもしれません。なにごとも自分たちの力で切り開く自立した地域性も、

つ現れてきているように思えます」  
二〇歳の集いのアンケートでは、益田で暮らしたい、魅力的な大人が多いといった肯定的な回答が年々増えているという。地域を支える大人と対話を重ね、数々のチャレンジが見られるまちの変化を感じた。未来の担い手が羽ばたく日はもう間近なのかもしれない。

り組み始めて一〇年が過ぎた今、再び芽吹きはじめているようだ。

「益田管内の高校卒業後の地元就職率は以前は二割程度でしたが、ここ数年、四割前後まで上昇しています。人口減少のペースは、将来推計に比べてわずかながら和らいでいます。ひとつづくりを続けてきた効果が少しず

かつたことが育  
んだといわれて  
います」  
そんな地域に  
根付いた力は、  
ひとつづくりに取

江戸時代に浜田藩、津和野藩の藩境に位置し、権力が及びにく

ん。なにごとも自分たちの力で切り開く自立した地域性も、

ます。実際、他県出身の私もそうでした。その風土は、港町だった歴史が培つたのかもしません。

「益田は外から来た人が溶け込みやすいいまちだとよく言われ

た。益田の住民の気質に関して、山本市長はこう分析する。

「人懐っこく、誰にでもオーリフ  
ンに接する」

## ひとつづくりの施策

A wide-angle photograph of a river scene. The river, with its deep blue water, curves from the bottom left towards the center of the frame. On the left bank, there's a sandy area and some low-lying greenery. The right bank is rocky and covered with dense green trees and bushes. In the background, there are more hills and mountains, also covered in green. The sky is a clear, bright blue with no clouds. A tall utility pole stands on the right bank, and a small white building is visible on a hill in the distance.

日本海に注ぐ高津川は、支流を含めダムがない一級河川。全国でもトップクラスの水質の良さを誇り、良質な天然鮎の産地としても知られる。